

【水の作文大賞】

大切な水は誰が守る？

熊本県 熊本県立八代中学校 2年

浦川 うらかわ 菊乃 きくの

「今日も海がとってもきれいだね！」

家から出ると、そこはカモメが飛び交い潮風が心地良い。まるで港の王国のようだった。小さな船が魚をつりに、広い海に出て行き、私は海に向かって石投げをすることが好きだった。これは、十年前の私の記憶だ。

海のきれいな天草で生まれた私は、小さい頃から水が大好きだった。三歳になる時に、父の仕事の転勤で引っ越しをしたにもかかわらず、風で波立つ海水や、きらきらと光る水面は私の目にしっかりと刻まれている。

それから物心ついた頃、私は変わることなく自然のままのすき通った水が好きだ。水の中に手や足を入れた時の冷たく皮膚をおおう不思議な感覚や、舌にふれた時の言葉にならない美味しい味に、私の興味はどんどん吸いこまれていくのだ。そんな「水」には、沢山の課題がある。

「酷い。どうして皆、ゴミを海に捨てていくの？」

これは、小学校低学年の時の私が、とある海を見て発した言葉だ。私はこの頃、母につれられて、福岡県久留米市で開催されていたイベントの「みんなで海のそうじをしよう！」に参加した。まだ幼かった私は、海のそうじとはなんだろう、と首をかしげまさかあの美しい海にゴミが落ちていたりなど考えもしなかったのだ。だからこそ、海に大量のゴミが落ちていた時のおどろきは相当なもので、ゴミを拾い終わったあとの、私のイメージ通りの「海」に近づいた感覚はすさまじかった。この時にはじめて私は、きれいな水が人の手によって汚されていた事実を知ったのだ。

そこで私は、小学四年生の自由研究テーマを“汚れてしまった水をろ過してきれいにしよう”というものにした。早速、生活雑排水を用意し、ペットボトルに砂、石、炭などの形や大きさの違う物質で層を作った。

そして層と層の間に不織布を挟み、自作のろ過装置で汚水をろ過してみた。しかし実験は完全成功とはいかず、理想のとうめいな水は遙か先にあると感じた。人間が元のきれいな水を汚してしまったにも関わらず、その人間の一人である私は、水を元の姿にもどしてあげられなかった罪悪感でかなりショックを受けた。

ならばどうだ。汚れてしまった水をきれいにすることよりも、これから水をなるべく汚さないように努力すること。この方が自分にもできる気がした。それから私は、生活を少し見直してみた。すると、意外と改善できる場所が見えてくる。例えば、お風呂で使用するシャンプーやリンス、ボディーソープ等。使用しない余計な量まで出しすぎてはいないだろうか？食器洗剤でも同じことが言える。

そして、日常でそれらの事を意識すると、水の他の課題も見えてくる。「水のムダ遣い」である。シャワーの水や、水道の出っぱなし等、少し心がけるだけで、かなり水の消費量が減ったのだ。

地球は“水の惑星”と呼ばれている。この水にめぐまれたことがあたり前に感じてしまっていないだろうか。この環境にたよっている人間こそが地球を守るために、動き出すべきである。たった一人の人間の行動で、ごく数ミリだが環境を変えることができるのだから。